文部省選定
教育映画祭優秀作品賞
優秀映画鑑賞会推薦
科学技術庁推奨
日本映画ペンクラブ推薦

奥羽の鷹使い

――日本の狩猟習俗――

⊙企画＝国立歴史民俗博物館
⊙協力＝文化庁

●――すいせんの言葉

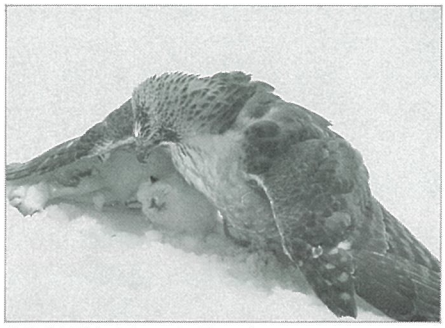
科学ジャーナリスト
元『自然』編集長　岡部昭彦

画面いっぱいに迫る大きな眼球と鋭いくちばし，
まことクマタカは精悍な猛禽類である。
ウサギを獲るようになるまでの，根をつめた鷹使いの
調整と訓練は緊張の連続であり，それは行を思わせるほどだ。
見事獲物を仕止めたタカに，鷹使いの松原さんは
ねぎらいの言葉をかける。
厳しさの中にも愛情がこめられ，
人とタカとの一体感が伝わってくる。
鷹使いは自然との調和をはかり，
山の掟を守って黙もくと暮らす。
鳥を使っての伝統狩猟の中で，
鵜飼が観光とともに栄えているのと
対照的に，野生を留める鷹猟のほうは
辛くも命脈を保つ。ひっそりと東北の山中で。
滅びゆく珍しい狩猟習俗を記録し，
タカの心理と行動をよく捉えて貴重なフィルムとなった。
同じ伝承でも，伝統工芸とは全く異なる生きものを対照とした
伝統狩猟の詳細が，初めて映像化されたことに注目したい。
新しくできた国立歴史民俗博物館の
嬉しい目配りによるものである。

⊙規格＝16ミリ・カラー／33分
⊙価格＝16ミリ／200,000円　ビデオ／55,000円

⊙製作
株式会社 桜映画社　〒151 東京都渋谷区代々木1-57-1
TEL03(3320)6311　FAX03(3320)7666

⊙配給



ウサギを捕える丁〈ヒノト〉号　6歳 メス

鷹使いの伝統的装束

山の神に豊猟を祈るノサ掛け

◉――あらすじ

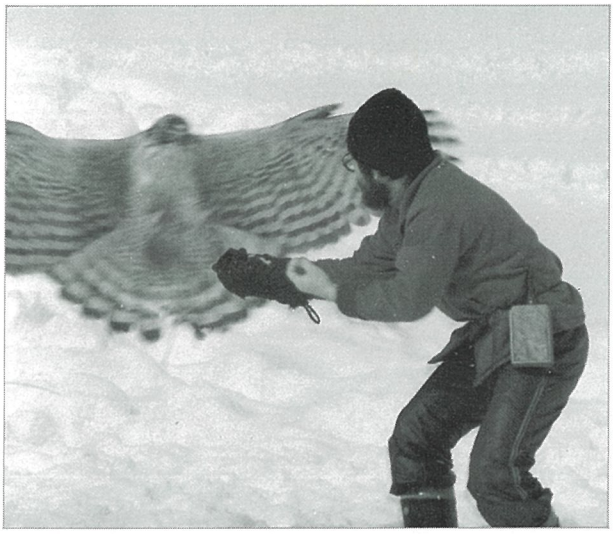
クマタカはイヌワシに次ぐ大型の猛禽である。この野性のクマタカを飼いならして，狩りに使う技術が雪国の奥羽地方に伝えられてきた。

現在，タカ狩りの技術を持つ者は，山形県の朝日村に住む松原英俊(35歳)と，秋田の羽後町に住む武田宇市郎(70歳)等で，わずかに残る貴重な存在である。

松原さんは10年前，山形の真室川町で今は亡き沓沢朝治からタカ狩りの技術を学んだ。

最近では野性のクマタカも，獲物のウサギもめっきり少なくなった。鷹使いでは生計を立てていくことはむずかしい。しかし，このタカ狩りの技術を何とか伝えようとがんばっている。タカ狩りは，毎年冬の季節を前に，狩りのための，厳しいタカの調整と訓練から始まる。

かつての山の民の間に生きつづけてきたこの貴重な狩猟習俗を後世に伝えるために，松原さんは今日も獲物を求めて，きびしい冬山に挑んでいく。



コテ(鷹使いの腕)に呼び戻す訓練

◉――鑑賞の手引き

文化庁文化財保護部伝統文化課
主任文化財調査官　**天野 武**

奥羽地方には猛禽クマタカを使って野ウサギなどを捕らえる猟法が伝承されてきた。この映画では，絶滅寸前にある鷹使いの習俗を，伝統的狩猟法の記録化という観点から，クマタカの飼育・訓練・調整などの実際を具体的に追求するとともに，冬山で繰りひろげられる狩りの様子を，鷹使いの装いや携行用具，新雪上に描かれた野ウサギの四肢跡，鷹使いとクマタカが一体となってなされる突っ込みの実際，獲物をおさえた瞬間，鷹使いによるクマタカのねぎらいなどの場面を構成してリアルに提示する。

この猟法は，我が国の多雪地帯に広く分布した，素朴な飛び道具を投げる威嚇猟法とも密接な関わりがあり，獲物は冬季における動物蛋白を得るために重視され，その毛皮は防寒具に利用されるなど，この地方に住む人々の生活に取りこまれてきた。いわば，生業の一手段としてなされてきたわけで，鷹使いはいわゆる鷹匠とは一線を画し，娯楽ないしゲームとして狩猟をする者とは性格を異にしたのである。

鷹使いは，本格的な猟期を目前にした年のはじめか小正月には，立木にノサ掛けして山の神に豊猟を祈願し，身の穢れを排して本番に臨んだ。編み笠を被り，サシコの着物を着た上に背当てをつけ，雪袴をはいてハバキをつけたほか，かかとにアクトカケを当て，ツマゴワラジをはく。それに新雪の深いときにはカンジキをつけた。こうした装いは，防寒・遮光などに対処するためだったとはいえ，愛するクマタカを腕に据(す)え，雪べらを手にするなどして，獲物を求め山歩きするのは並大低でなかったはずである。

厳しい自然条件に制約され生き抜いてきた人々の間に伝えられてきた鷹使いの猟法。そこには，自然の恵みを大切にし，恵みをもたらす山の神に感謝の気持ちを忘れず，自然との調和が保たれてきた。後世へ残したい狩猟習俗の典型例といえよう。

◉**対象**＝高校・大学・婦人・青年・成人
◉**用途**＝地域伝統習俗の理解・保存／一般教養

◉**スタッフ**

製作＝村山和雄　撮影＝山崎堯也　解説＝内藤武敏
脚本＝村山正実　照明＝浅見良二　録音＝福島音響
演出＝村山正実　音楽＝長沢勝俊